
DOG DAYS i f ストーリー ~ 閣下と記憶喪失の少年 ~
シオン

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DOG DAYS ifストーリー〈閣下と記憶喪失の少年〉

【Nコード】

N0357X

【作者名】

シオン

【あらすじ】

記憶喪失の少年が異世界フロニヤルドで時に戦い、時に笑い、そして恋をする。

そんな少年の物語…

EPISODE 1 「戦準備」(前書き)

主人公はオリジナルのガレット住民です。
それでは始まり始まり。

EPISODE 1 「戦準備」

動物の耳や尻尾を持った種族たちが暮らす、地球とは隔絶した異世界フロニヤルド。

弱冠14歳の少女ミルヒオーレ・F・ビスコッティ姫を代表領主とするビスコッティ共和国は、かつて友好関係にあった隣国ガレット獅子団領国との「戦」で敗戦を重ね、滅亡の窮地に瀕していた。

武勇に優れるガレットの戦姫レオンミシエリ・ガレット・デ・ロワ殿下に率いられる軍勢がビスコッティの城へ迫ろうというその時、ミルヒオーレは国の窮状を打破するための切り札として、異世界からの「勇者」召喚を決意する。

Wikiより抜粋

しかし、人知れず影で暗躍するモノが…

??? said

私は手の平に乗せた水晶を覗く。

そこに見えるのは先日ビスコッティとガレットの「戦」というスボーツ。

くだらん…全くもって馬鹿らしい。

本当の戦とは血で血を洗い、相手をねじ伏せ、相手を絶望させる…それが真の戦だ。

私はもう片方の手で握っている刀を強く握る。

私の力に反応してか、刀から力が溢れる。

ふふ…安心しろ。暴りたいのは分かるが、まだだ。

私は刀を軽く触れる。

すると溢れていた力が収まる。

それでいい…

「さあ、いい動きを見せてくれよ」

私は水晶に写る戦を見ながらそう呟いた。

s a i d o u t

1人の少年は1人少女のセルクルに跨りながらガレットの拠点——
——ココナ平野を目指していた。

「あの、ひ、姫様！ は、早すぎませんか！？」

「姫ではない、閣下と呼べ、閣下と！」

そう言い姫と呼ばれた少女はセルクルのスピードをさらに上げる。

「か、閣下あゝ！」

「しゃべるでない。舌を噛むぞ」

少年は振り落とされないよう少女に強く抱きしめる。

「な、／／／／さ、サクヤ！ 少し離れんか！／／／／／」

「む、無理ですうゝ」

「っ！？…サクヤ！？ 今、わしの…あん…胸を…あう／／／／／」

「え？ 何ですかあゝ？」

「だゝかゝらゝ！ わしの胸を…はう！」

そんな事がありながらも閣下——レオとサクヤはガレットの拠点

のココナ平野に着いた。

仁王立ちをしてサクヤの前に立つレオ。

それに対して正座をするサクヤ。

サクヤはレオの怒気に当てられてかとても小さく見える。

「サクヤ…何か言い残すことはないかのお？」

「え、えと…き、気持ち良かったですよ？」

「っ！？／＼／＼忘れるー！ー！！！」

「ぎゃあああああああ！ー！！！」

レオは持っていた斧でサクヤに叩きつける。

サクヤは避ける事もなく叩きつけられ気絶した。

「くっ…／＼／＼ゴドウィン！」

「はっ、何でしょうか、閣下」

レオがそう言うと、ゴドウィンという巨漢の男がレオの下に来た。

ゴドウィンはレオの前に行くといびぎを折り、顔を下げる。

「…進軍の方は順調か？」

「はっ、レオンミシエリ閣下。生憎の雨ですが、閣下の仰せ通り、

明日の砦攻めに備え兵士達には十分に休息と食事を取らせております」

「ふっ」

レオはグラスを出すと後ろで控えていた少女、ビオレがワインをグラスに傾ける。

「明日もまた、ビスコッティの犬姫に敗戦の屈辱をくれてやるとしよう」

そしてレオはグラスを傾けワインを1口飲んだ。

「ふふ…明日の戦が楽しみじゃ」

レオがそう言う外で雷が鳴った。

「して、閣下、このサクヤ殿はいたい…」

「知らぬ、そんな奴は…どこかの部屋で寝かせておけ」

「はっ、承知しました閣下」

ゴドウィンはサクヤを担ぐと部屋を出て行き、寝室へとサクヤを運んでいった。

EPISODE 1 「戦準備」(後書き)

最後がほぼアニメ…そして主人公が目立ってない…

呼んでくれた皆さん。これからも末永く、生暖かい目でするしくおねがいします。

EPISODE 2 「勇者見参！」（前書き）

激しくグダグダです。

それでもいいなら…どうぞ！

EPISODE 2 「勇者見参！」

「うゝん…ここは？」

サクヤは体を起こし辺りを見回した。

「テント…何でテントに？」

どうやらサクヤはテントで寝ていたようだ。

しかしサクヤは何故テントで寝ていたのかに首を傾げる。
すると外から盛大な花火の爆発音が響いた。

「花火……………ああ！？ 戦！」

サクヤは服を着替えるとすぐにレオ達の下へ行った。

「はあ…はあ…す、すみません姫様」

息を切らせながらサクヤはセルクルに跨るレオに謝罪した。

「姫ではない。閣下じゃ。…まあ良い。許してほしいなら今日の戦で答えてくれ」

「は、はい！ 閣下！」

「…開きましたぞ」

ゴドウィンがそう言うと、目の前の砦の扉が開かっていた。

「よし、砦の門より進軍する」
「はっ！」

レオは後ろを振り向き、後方にいる兵士達に呼びかけた。

「いくぞ者共！ 今日こそフィリアンノ城を落とし、犬姫と騎士共を泣かせてくれようぞ！」

「「「「「おおー！！！！！！！！！！」」」」」

「うおおおおおおお！！！！」

「お、おお」

兵士達とゴドウィンの気迫に負けてか締りの無い声を上げるサクヤ。ものすごく頼りない。

「…乗れ、サクヤ」

「い、いいんですか閣下？」

「ああ、だがまた胸に触ったりするようなら…」

「ひ、ひい！ 触りません触れません当たり前！」

サクヤは全力で頭を下げる。

そうでもしてないとまた斧で叩かれそうな雰囲気だった。

「分かったのならよい。さあ、乗れ！」

「はい！ 分かりました！」

サクヤはレオの後ろに乗り、レオはセルクルを走らせた。

「わしはここで待機しておく。だがビスコッティに骨のある奴が現

れたら…わしが仕留める」

「はっ！」

「行けゴドウィン！ 進軍だ！」

「閣下の仰せのままに…」

ゴドウィンはレオに深く頭を下げると立ち上がり、踵を返して戦場に向かった。

「あの…閣下。僕も行きますね」

「うむ。そうか」

「えと…僕の活躍、見てください！ 閣下のために頑張ります！」

「そ、そうか…が、頑張つて来い／＼」

「はい！」

サクヤは後ろを振り向き、ゴドウィンを追うように戦場へ向かった。

サクヤは兵隊を整え、指揮を促す。

「みんな、今からここを突破する！ ここを突破すれば拠点まですぐそこだ！」

「…「おおー！！」」

「だけど、ここを突破するにはビスコッティの騎士、エクレール・マルティノッジを倒さなくてはならない。そこで…」

サクヤは一拍置き、兵士達に言った。

「僕がエクレールと戦う。みんなはその間にビスコッティの拠点を目指して！」

「「「おおー！！」」」
「よし…出陣だよみんな！」

その言葉を合図にサクヤが率いる兵士達は一気に動き始めた。
そしてサクヤは1人立ち向かう垂れ耳の騎士へと向かった。

サクヤ said

「さて…エクレールをどうかしないとな」

僕はグローブを付け直しながら目の前の光景を見る。
紋章砲によって僕達の兵士がけものだまに替えられていた。
そろそろだね。

「サクヤ…行きますす！」

僕はエクレールの下へ駆けた。
エクレールは気付いていない。
貰ったよ！

僕は紋章砲の攻撃によって起こった煙に隠れながらエクレールに向
かった。
 فقط、
だけど、

「え！？」

足を躓いてか派手に転んでしまった。
ううゝ痛い…

「っ！？ サクヤ！ いつの間に！」

あ、バレた。

…仕方ない。

「油断してちゃダメだよエクレール」

「いや、お前が油断してるだろ」

ぐっ！？

い、痛いところ付いてくるね。

「き、気のせいだよ。…それより」

僕は構えを取る。

するとエクレールも気付いてか構えを取った。

「今日こそ城は落とさせてもらうよ！」

「そうは…させない！」

エクレールの剣と僕の拳がぶつかった。

鉄と鉄がぶつかり合う音がし、お互いに距離を取る。

威力は互角…でも、

僕は…勝つんだ！

「はあああああ！」

「くっ！？」

また剣と拳がぶつかる。

でも今度は僕が打ち勝った。

よし、これなら…

『おおつとお！　今、大変なニュースが入りました！』

僕が再びエクレールに攻撃を仕掛けようとした時、実況のフランボワーズが叫んだ。

僕とエクレールは攻撃を一旦止め、空に浮かぶ映像を見る。

『ミルヒオーレ姫がこの決戦に勇者召喚を使用しました！』

ゆ、勇者召喚だつて！？

…って何？

「あのエクレール。勇者召喚つて…」

「知らないのか？　フロニヤルドの領主にのみ許された、異世界から勇者を召喚する儀式の事だ」

「へえ」

僕達は再び映像を見る。

『これはすごい！　戦場に勇者が現れるのを目にするのは私も初めてです！』

異世界からの勇者…か。

『さあ！　ビスコッティの勇者はどんな人物なのか！』

ビスコッティの勇者か…気になるけど、

「今は…こっちに集中しないと」

僕は拳を握り、エクレールに向かって駆けた。
エクレールは剣で迎え撃つ。
僕達の戦いの第2ラウンドが始まった。

s a i d o u t

サクヤとエクレーが何度か剣と拳をぶつけ合った時、マイク放送が聞こえた。

発信源は…フィリアンノ城のミルヒから。

「ビスコッティの民の皆さん。ガレット獅子団領の皆さん。お待ちせしました！ 近頃、敗戦続きなビスコッティですが、そんな残念展開は今日を限っておしまいです！ ビスコッティに希望と勝利をもたらしてくれる素敵な勇者様が来てくれましたから！」

ミルヒから映像が変わり、現れたのは白いマントをなびかせた1人の少年。

「華麗に鮮烈に、戦場に登場してもらいましょう！」

ミルヒの合図と同時に勇者の後ろから花火が上がる。

勇者は棒を宙に投げると、バク転するように空で回転し、見事着地。そして落ちてくる棒も見事、勇者の手に納まった。

「姫様からのお呼びに預かり、勇者シンク、ただいま見参ッ！」

勇者が戦場に舞い降り、戦はさらに苛烈のモノになっていく…

EPISODE 3 「姫様参戦！」（前書き）

アニメではEPISODE 2です。
ではどっぞー！

EPISODE 3 「姫様参戦！」

前回のあらすじ

ビスコッティ対ガレットの拠点制圧戦が開始。

ガレットが優先のその時、ビスコッティの姫、ミルヒは勇者を呼び出した。

「では華麗に鮮烈に、戦場に登場してもらいましょう！」

「姫様からのお呼びに預かり、勇者シンク、ただいま見参ッ！」

激闘の拠点制圧戦…再びスタート！

「ほう、犬姫め。勇者を召喚したか」

ガレットの拠点にいるレオはそう呟いた。

レオは空の映像に写るシンクを見ていた。

シンクはものすごいスピードで襲い掛かるガレット兵を次々倒していった。

レオはセルクルに跨ると、走らせる。

「ビスコッティの勇者…お前の力。見せてもらっぞ！」

拠点よりレオが出陣した。

「勇者か…なかなか強いね」

「姫様のご決断とはいえ、別に勇者など…」

エクレは呟くように言う。

そしてエクレは腕を前に交差させると、後ろから大きな紋章が現れた。

「なっ！？ みんな！ 僕の後ろに！」

サクヤも急いで構えを取ると、後ろから大きな紋章を出現させた。

「烈空ツ十文字！」

「守護ツ断絶陣！」

エクレは交差した腕を十字に切るようにして攻撃を放った。

それに対してサクヤは拳を地面に叩きつけ、前方に巨大なバリアのようなモノがサクヤ達を覆った。

2つの紋章砲がぶつかり、煙が上がった。

攻撃の余波で何人かは、けものだまになったが大半は無事であった。煙が晴れないままガレットの兵は拠点、紋章砲を使って疲れているエクレへ向かった。

しかし、

「勇者キーーーーック！」

突然横から現れた勇者によってエクレへ向かった兵士はけものだまに変えられてしまった。

「押推！ 勇者と呼ばれましたシンク・イズミです！」

悠然と現れた勇者。

それをサクヤはじつと見ていた。

サクヤ said

「早っ！？」

さっきまで拠点にいたのもうこんなところまで…

勇者…やっぱり只者じゃあないみたいだね。

今はエクレールと何か話をしてるみたいだけど…何だろう？

「まずは自分の紋章を発動させる」

「紋章発動！ レベル1」

えっ！？ まさか…紋章砲！？

「全身の力と気合を込めて、紋章を強化！」

まずい…エクレール1人でもキツイのに2人だと…

「レベル2…」

「っ！？ みんな！ 下がって！ さっきより強力な紋章砲がくるよ！」

「レベル3！」

紋章が浮かび上がった…みんな…急いで！

「フロニヤ力を輝力に変えて、己の武器から撃ち放つ！」
「それが、紋章砲！」

間に合え！

僕も急いで紋章を出す。

「やあああああああ！！！」

「はあああああああ！！！」

「間に合ええええええ！！！」

勇者とエクレールから紋章砲が放たれる。

僕も地面に拳をぶつけ、さっきより強力なバリアを張る。

2人の紋章砲と僕の紋章砲がぶつかる。

だけど、

「くっ！？」

お、重い…なんて重い攻撃だ…

ふ、防ぎ…きれない！

バリアが壊れる。

僕は動かない身体に鞭を打って、寸前で攻撃を避けた。

でも、避けた攻撃は後ろにいた兵士達にぶつかり、大量のけものだ
まが現れた。

…ごめん。みんな。

「紋章砲は便利だが、防具や甲冑を許された戦士長や騎士には防が
れる事が多い…あのようにな」

「はあ…はあ…」

エクレールが僕に何かを言ってきた。
…何だろう？ 褒めてくれてるのかな？

「それになにより…」

「撃つと、結構疲れるね」

「よく考えて使え」

「ありがとうございます！ 頑張りますっ！」

一気に2対1…このままじゃあ、

「よくやった。サクヤよ」

「えっ!?!」

僕の横から紋章砲が放たれた。

この声、この攻撃、まさか！

横から放たれた紋章砲は勇者に向かうが、エクレールが前に出て防ぐけど…威力が強かったのか後ろに吹っ飛ばされていた。

「ほんのちびつと、期待して来てみたが…やはり犬姫の手下か」

「ひ、姫様！」

「レオンミシエリ姫！」

戦場に現れたのは僕達の姫様。レオンミシエリ姫だった。

「姫様？ あっちの？」

勇者が何かを言う。

姫様は僕らを見て、言葉を放つ。

「ちっちっ…姫などと気安う呼んでもらっては困るのぉ」

姫様は口元に指を添え、さらに続ける。

「我が名はレオンミシエリ・ガレット・デ・ロワ。ガレット獅子団領国の王にして、百獣王の騎士！」

姫様のセルクルが1歩前へ出て、最後に1言。

「閣下と呼ばぬか！ この、無礼者！！！」

それと同時に爆発と共に姫様の後ろから大きな紋章が現れた。

s a i d o u t

EPISODE 4 「決着！ レオvsシンク&エクレ」（前書き）

今回は長いです。
では、どうぞ！

9 / 29 修正しました。

EPISODE 4 「決着！ レオvsシンク&エクレ」

前回のあらすじ

ビスコッティの勇者、シンクの大活躍により一気に攻められるガレット軍。

シンクとエクレの2人の合体紋章砲攻撃に意気消沈するサクヤであったが、

「ほんのちびつと、期待して来てみたが…やはり犬姫の手下か」

「ひ、姫様!？」

「我が名はレオンミシエリ・ガレット・デ・ロワ。ガレット獅子団領国の王にして、百獣王の騎士!」

現れたのはガレット獅子団領国の姫、レオであった。

「閣下と呼ばぬか！ この、無礼者!!!」

激闘の拠点制圧後半戦…スタート！

『来たー！ー！ 来ました！ レオ閣下！ 戦場に到着です！ 愛騎ドーマも、相変わらず凛々しい!』

「あの…姫様。何でここまで…」

「閣下じゃ…何、犬姫の呼んだ勇者がどれほどのものか見に来ただけじゃ。まあ、大した者ではなかったがの」

レオはそう言うセルクル…ドーマはサクヤを加えて背中に乗せた。

「それはさておき、ワシ達は先に進ませてもらう」

レオはドーマを走らせ、サクヤと拠点へと向かった。

「…すみません閣下。あんな見苦しい所を」

「かまわん。まだ戦は始まったばかりじゃ。この後に期待しておる」
「っ！？ あ、ありがとうございます閣下！」

その一方後方のシンクとエクレは…

「この…ずっとこの勇者があああああ！…！」

「あああああああああ！…！」

『おっと、仲間割れか！？ そしてこの勇者、意外とアホか？』

何やらコントをしていた。

レオ操るドーマは川の上に立つ、木の棒を悠然と進んでいた。

「ひい！ 危なっ！？ お、落ちるうゝ！？」

「しっかり捕まっておれ！」

レオはサクヤに言いつけるように言い放つ。

そして進んでいくと、矢倉があり、そこには数十人のビスコッティの弓兵がいた。

「閣下！ 前に敵が！？」

「ふっ、このくらい…」
「撃てえ！」

弓兵より矢が放たれ、大量の矢がレオとサクヤを襲う。

「ひ、姫様あゝ！」
「姫ではない、閣下だ！」

レオは槍を出現させ、それを前に出し回転させる。
降り注ぐ矢は、回転する槍によってすべて弾かれた。

「ええ！？」
「す、すごい…」

ビスコッティの兵士は驚き、サクヤは感嘆の声を上げる。
レオは掌に小さな紋章を発生させると、槍を矢倉に投げつけ爆発させる。

これにより矢倉の兵士は全員けものだまにされた。

『す、すごい！ レオ閣下と愛騎ドーマ！ まさに人騎一体の勢いでポールエリアを抜けて行きます！』

「す、すごいです閣下！」
「このくらい当然だ！」

サクヤ said

すごい！
さすがは閣下だ。

あの状況をいとも簡単に攻略するなんて…尊敬します！

「レオ閣下！ あのエリアは？」

「あれはすべすべ床のつり橋エリアだ。まあ、ワシとドーマの敵ではない！ 行くぞ！ ドーマ！」

ドーマは飛び上がり、対岸へと飛ぶ。

2人も背負ってるのに…さすがはドーマだ。

「…させるかあああああ！！」

後ろから声が聞こえ、振り向く僕。

後ろには勇者とエクレールが僕らに向かって飛んできていた。

「飛び降りろ！」

「ええ！？」

僕はレオ閣下の言われた通りドーマから飛び降りる。

同時に閣下もドーマから飛び降り、2人の攻撃をかわした。

レオ閣下はかわした後、斧を出現させ、掌に小さな紋章を出し、紋章砲を放つ。

紋章砲は2人に当たり、地面に叩きつけられる。

さらにレオ閣下はドーマによって空中に投げられた盾を受け取ると優雅に着地した。

か、カッコいい！ さすがレオ閣下！

「痛い…」

「むう…」

…何だろう。

偶然とはいえ、勇者がエクレールを押し倒しているように見える…
てかさつき胸に顔埋めてなかった？

「勇者！ お前は何なんだ！ 戦いの邪魔をしに来たのか！」
「そっちこそ！ 僕の邪魔を…」

喧嘩かな？ てか立たないの？ 隙だらけだよ？

僕は2人に向かおうとするけど、突然横からものすごい輝力を感じ
立ち止まる。

この輝力は！？

「か、閣下！？」

「うおりやあああああああ！！！！」

閣下は振り上げた斧を地面に叩きつける。

すると地面から閣下と同じ紋章が浮かび上がった。

やばい！ 僕も紋章砲を！

「獅子王炎陣ッ！」

「守護断絶陣ッ！」

閣下の周りを中心に火柱が上がり、空からは流星群が落ちてくる。

…敵も味方も関係なくレオ閣下の攻撃が繰り広げられる。

「紋章術ってこんな事にも…」

「レオ閣下のは特別だ！ やられたくなければ…」

「…とにかく逃げる！！！」

あの攻撃から避けてたんだ…って僕だって油断できない！ 油断し
たら…みんなの二の舞に…

僕はさらに輝力を込めてバリアを強化する。

「大・爆・波！！！！」

レオ閣下が斧を振り上げ、高々に声を上げる。
するとレオ閣下を中心に大規模の大爆発が起こった。

『爆破あゝ！！ レオンミシエリ閣下の必殺技！ 獅子王炎陣大爆破！ 範囲内にいるかぎり、立っている者いないと言われる超絶威力の紋章砲！ … 味方をも巻き込むのが玉に瑕ですが、それにしてもすごいっ！』

長い説明ご苦労様、フランボワーズ。

… はあゝ、死ぬかと思った。

「閣下… その技やる時は一言言ってくださいよ… 死ぬかと思いましたよ」

「何じゃサクヤ。生きておったのか」

「酷いつ！ 僕、生きる為に必死だったのに！！」

『な、な、なんとおー！ あの獅子王炎陣大爆破を喰らって、まだ立っている者がいましたあー！ その方は… ガレット領国軍のサクヤ殿下だあー！！！！』

「え、え？ えと… あははは」

何だか目立ってるような… 恥ずかしい…

「フランボワーズ、確認せい！ 勇者と垂れ耳はちゃんと死んだか？」

「ちよ、閣下！ 死ぬとか縁起の悪いこと言わないで下さい！」

『ああ、はい。… ええとですね…』

落ちてきた勇者の棒が閣下に襲い掛かる。

閣下は勇者の攻撃を斧で受け止める。

2つの武器はぶつかった所を中心に小さい爆発を起こす。

勇者は爆風を利用して回転しながらレオ閣下から距離を取った。

さらに後ろからはあの高さから落ちてきたのにケロッとしているエクレール。

規格外すぎるよこの2人…

2人は前方と後方からレオ閣下に攻撃を仕掛ける。

レオ閣下は2人の攻撃を斧と盾で防ぐけど…

「なっ！？ 閣下の斧と盾が！？」

閣下の斧と盾が壊れた。

2人は再びレオ閣下から距離を取って、攻撃を仕掛ける。

「閣下あ！」

「来なくてよい！」

「っ！？」

閣下の言葉で動きを止める僕。

2人は閣下に攻撃を仕掛けるがそれを閣下は伏せて避ける。

しかし2人はその場で方向転換し、再び攻撃を仕掛けた。

「はあああああああ！！！」

「うおおおおおおお！！！」

2人の武器は閣下の防具に当たり、防具が壊れる。

…えっ！？

勇者は振り返りレオ閣下を見る。

でもその顔は若干赤かった。
…まあ僕もだけど。

「うむ。チビと垂れ耳相手だと思って少し油断してしもつたのお」

閣下は腕を広げ自分の身体を見せびらかすようにする。

ひ、姫様あー！ー！？

「このまま続けてやってもいいが…それでは両国民へのサービスが過ぎてしまうのお」

「レオ閣下…それでは」

「ん。ワシはここで、降参じゃ」

レオ姫様はどこからか出したのか白旗を上げてそれを振る。
すると姫様の後ろから大きな花火が打ち上がった。

「まさか、まさかのレオ閣下敗北う！ 総大将敗北ボーナスとして
ビスコッティに350ポイントが加算されます！」

ビスコッティの点数掲示板に350ポイントが加えられた。
つてそれより、姫様あー！

「今回の勝利条件は拠点制圧なので戦終了にはなりません、この
ポイント差は致命的！ ガレット側の勝利は、ほぼ無いでしょう
！」

「姫様あー！」

「姫ではない、閣下と呼べ」

「そんなのいいです！ それより服を…ああ、無い。…とりあえず
僕の服を着てください！ 姫様も可愛い女の子なんですから！」

「う、うむ。わかったぞ／＼」

まったく…姫も色々と危ないな。

そんな姿でテレビに出て恥ずかしくないのかな？

現在ここの戦は一旦休戦してインタビューを受けている。

「勇者よ、親衛隊長の力を借りたとはいえ、ワシに一撃を入れた事は褒めてやろう！　だが、今後も同じ活躍が出来ると思うなよ！」

姫様が勇者に向けてマイクを投げる。

受け取った勇者は、

「ありがとうございます！　姫さ…」

姫様の尻尾が伸びて姫様が答える。

「閣下じゃ！」

「…閣下！」

「うん！」

姫さ…閣下の笑顔…やばい、可愛すぎるよ…

「閣下との戦い、怖かったけど…楽しかったです！」

閣下は後ろに振り向くと尻尾でエクレールの方を指した。
エクレールにも話させる、って事かな？

勇者はエクレールに向かってマイクを投げる。
すると、

「撮影班、垂れ耳に寄れ。良い絵が取れるぞ」

そう呟いた。

「何ですか？ 良い絵って？」

「お主は見なくて良い！」

「むぎゅ！」

閣下が僕の顔にアイアンクローをかます。

これじゃ、見えない…てか痛い！？

「おおっと…」

エクレールの声が聞こえる。

そしてマイクを受け取った後、何かが破ける音がした。

何！？ 今の音！

「…ああ、あああああああああ！！！！」

『勇者あゝ！ 味方騎士に誤爆うゝ！ 防具破壊を超えて、服を破壊してしまっただけ！』

な、何ーーー！！

じゃあ今のエクレールは、は、裸なの！？

み、見たい…でも見れない！ そして痛い！

「また来るぞ！」

閣下が誰かに向かってそう言った。

片手は未だに僕の顔を掴んでるけど。

「今度はきっちり侵略してやろう！」

そして閣下は歩き去る。
てか、

「閣下！ いい加減手を離してください！ 頭が…頭が割れる〜！」
「嫌じゃ！ これぐらい我慢せい」
「そんな〜」

この後数分間、僕は閣下にアイアンクローされたままだった。

ちなみに後ろでは、

「このバカ！ バカ勇者！」
「だからゴメンって、許してよ！」

再びコントを繰り広げていたようだ。

s a i d o u t

EPISODE 4 「決着！ レオvsシンク&エクレ」（後書き）

次回はオリジナルの予定です。
お楽しみに！

EPISODE 5 「大決着！ サクヤvsシンク」(前書き)

オリジナル回。
では、どうぞ！

1人称
サクヤ↓ボク
シンク↓僕
になりました。

EPISODE 5 「大決着！ サクヤvsシンク」

前回のあらすじ

レオの猛攻により、一気に攻められたビスコッティ軍。

しかしシンクとエクレのコンビネーションにより、レオの撃退に成功。

「今度はきっちり侵略してやろう！」

レオは2人にそう言い、華麗に戦場を去った。

その後、ポロリなどの展開があったもののまだ、戦いは終わってない！

激闘の拠点制圧最終戦…スタート！

「はぁ…はぁ…」

「何じゃ、このくらいで根を上げよって…」

「いや閣下…すごく痛かったですよ？」

レオとサクヤは先程、戦っていた場所から少し離れた場所にいた。

「さて…ワシはもう戻るが、サクヤはどうする？」

「えと…まだここに居よう方だと思います。まだ負けたわけではありませんから」

「ふむ。なら期待しておくぞサクヤ」

そう言い、レオはサクヤの頭を撫でる。

「はい！ 閣下！」

サクヤはレオに頭を下げるとビスコッティの拠点へと向かった。

シンク said

「へえ、姫様って歌とか歌うんだ…ほぐう！」

僕が感心しているとエクレールが僕を蹴って来た。

「歌うんだとは、何事だ！ 姫様は世界的に有名な歌い手であらせられるんだぞ！！」

「世界！？」

す、すごいな、姫様。

可愛いだけじゃなくて歌でもすごいんだ。

「そうだよ」

そう聞こえエクレール後ろを見るとロランさんがいた。

手にはエクレールの服があった。

いや…／／あの…／／ロランさん？ エクレールの…その…パ
ンツが…見えてるんだけど…／／／

「お疲れ様だ、勇者殿。エクレール」

今僕はロランさんから姫様の事を聞いています。

エクレールはその間、ロランさんの背に隠れて服を着ています。

「姫様は他国との会や交流のさい、楽団を連れ世界中で歌われてるんだ」

「なるほど」

そうか。

だから歌が上手いんだな。

「ただ近頃は、戦続きでツアーもめつきり滞ってしまってたね。我々も久しぶりに姫様の歌を聞けるくらいなんだが…」

「貴様も姫様の歌を聴いたら納得するだろうな」

エクレールがロランさんに隠れながら言ってきた。

「活躍してくれた勇者殿には、特等席で聞いてもらおう事にしよう」

姫様の歌か…。

楽しみだな。

「はい。ありがとうございます。…あ、でもあの…」

僕がある事を言おうとしたら、後ろから大きな爆発音がした。

僕、エクレール、ロランさんは爆発した所を見た。

そこには…

「まだ、戦いは、終わってないっ!!」

閣下の隣にいた、あの騎士がいた。

s a i d o u t

サクヤs a i d

見つけたよ…勇者!

「まだまだよ、まだボク達は…負けてない!」

『おおーっ!』と! ビスコッティ拠点近くにてガレットの騎士を発見! その騎士は…サクヤ殿だぁーっ!』

ボクの後ろから火花が上がった。

ここまで来たんだ…絶対、拠点制圧してやる! 姫様の為に…ガレットのみんなの為に!

「来い、勇者! ボクが相手だ!」

勇者はエクレール達を制止して1歩1歩ボクの所へ歩いてくる。

そして残り5メートル近くで足が止まった。

「僕だって、姫様やみんな、ビスコッティの為に…負けれない!」

勇者が言う。

ボクだって…負けれない!

「ボクはガレット獅子団領国騎士、サクヤ！」

「僕はビスコッティ共和国勇者、シンク・イズミ！」

「いざ——」

「尋常に——」

「「勝負ッ！——」」

ボク達の拠点制圧最終戦が今、始まった。

「はあああああああ！」

「うおおおおおおお！」

ボクの拳と勇者のロッドが幾度となくぶつかる。

ボクと勇者はあれから武器と武器をぶつけ合うだけで、相手に決定打を与えられてない。

もう時間もボクの輝力は少ない…早めに仕留めないと！

ボクは勇者から一旦後ろにステップして改めて構えを取る。

「……………」

勇者はロッドを構えて止まっている。

ボクの動きを待っているのか、それとも…何か仕掛けるのか。前者ならいい。けど後者なら…厄介だ。

でも…ボクは止まれないんだ！ 姫様の為に！ みんなの為に！

「負けられないんだっ！」

「っ！？」

ボクは背に大きな紋章を出しグローブ同士を乱暴にぶつける。
するとボクのグローブから炎が宿る。

その炎を維持するように紋章術で制御して…それを強化！
炎はさらに火力を増す。

「行くよ勇者…これがボクの必殺技…」

足に紋章術を使い、脚力を強化。

これで一気に勇者に近寄る！

勇者はボクが一気に詰め寄った事に驚いて、急いで防御の構えを取る。

でも…遅い！

「疾風ツ！」

「っ！？」

「爆炎拳ツ！…！」

ボクの拳が勇者の腹に入る。

勇者は近くのトラップに吹っ飛び、トラップが崩れた。

「はぁ…はぁ…どうだ、勇者…！」

『決まったーーーーっ！ サクヤ殿の必殺技！ 疾風爆炎拳！
拳に炎を宿して、相手の防御を無視してダメージを与えるサクヤ
殿の紋章拳！ しかも！ 足に紋章術を使って、相手に一気に接近
する事によって相手の意表をも突ける！ これには勇者もダウンか
！？』

はぁ…はぁ…ボクの全開をぶつけたんだ。
立てるわけがな…

「はは…今は…結構ヤバかったかも」

「な、な、なななな！ た、立った————っ！！！！
勇者！ サクヤ殿の紋章拳を喰らつて尚、立った————
——っ！！！！」

そんな…ボクの…全開を…耐え切った！？

でも時折、足がたついたりしていた。

ボクは勇者に向かって駆けた。

次の一撃で決める！
その為には…まずはロッドを使えなくさせる！

勇者に向かって拳を突き出す。

今だ！

ロッドは……宙に上がった！
後は、から空きの勇者だけ！

これで…

ボクは勇者に拳を振るう。

「つ！？」

まさか！

ボクの拳は勇者に当たらなかった。

空を切るボクの拳。

そして……上へジャンプした勇者。

その手には……さっきボクが飛ばしたロッドが握られていた。

「サクヤ、この勝負…」

勇者がボクに言う。

ボクは急いで防御の構えを取りながらその声を耳にする。

「僕の勝ちだああああああああああつ！！！」

勇者のロッドがボクに振り下ろされた。

ボクは防御しきれず、それを身体で受け止める。

まさか…ここまで…誘われてた…なんて…ホント…勇者は…強い…
や…。

s a i d o u t

EPISODE 5・5 「閑話休題」(前書き)

ちょっとした話です。

ストーリー関係無しのおしゃべり回です。

ではどうぞ！

EPISODE 5・5 「閑話休題」

はいどうも。DOG DAYS if ストーリー閣下と記憶喪失の少年の作者のシオンです。

サクヤ「どうもです。この作品の主人公をやらせてもらってます、サクヤです」

いや、やつと最初の戦いが終わったわ。

サ「そうだね。原作2話を2分割してさらにオリジナルを1つ……」

これを読んだアナタはDOG DAYSの1話と2話を見たことになる！

サ「まあ、内容が所々違うけどね」

そうだな。

さて……この物語は記憶喪失の少年——サクヤが戦い、笑い、恋をする。

そんな物語だ。

サ「突然振り返ってどうしたの？」

いや、ここまで記憶喪失の少年——まあお前なんだが、その姿とつか、描写とつか、そんなの無かったからさあ。

サ「そういえば、そうだね」

前振り無しに突然「実はボクは記憶喪失なんだ…」とか言われても読者は「はあ!？」とか「マジ突然…」とか「後付設定だろ?」とか思われるだろ?

サ「ううん…そうかもね」

まあそれでも、気付いてる人もいるだろうけど。
てかさっちの人数の方が多いと思う。

サ「そうだね。記憶喪失に出来るキャラ限られてるしね」

だな。

ちなみにサクヤの記憶喪失については別の話にて。

サ「楽しみにしてて下さい!」

さて…最後にこの先についてだが…まあ原作^{アニメ}通りに進めるなら、姫様奪還戦か…

サ「そうか…という事はガウが出るんだね」

ジェノワーズやダルキアン、ユキカゼもな。

サ「意外とリコッタが初登場でもあるね(今作)」

いっぱい出るねえ。

まあ頑張らしようか！

サ「じゃあ今回はこの辺で…」

シノサ「また次回に！」

EPISODE 5・5 「閑話休題」(後書き)

現在お気に入り登録6名に感想2件です。

お気に入り登録してくださった皆さん。

感想を2度も書いてくれた2次元先生。

そしてこの駄作を読んでくださる読者のみなさま。

これからも末永くよろしくお願いします！

感想なども受け付けてます！

ではまた次回に！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0357x/>

DOG DAYS if ストーリー～閣下と記憶喪失の少年～

2011年10月10日02時27分発行